

2018年10月25日発行
日本山岳会 緑爽会
発行人 富澤克禮



デザイン・制作 関塚貞亨

～～《寄稿／投稿》～～

私が敬愛した長老たち <その2>

関塚 貞亨

最初に、緑爽会 8 月号に掲載した山田二郎さんの生年、逝去月日に誤りがありました。正しくは（1922 年～2014 年）で、92 歳で逝去です。『山岳』第 110 年の田辺壽さんの追悼記を読んでいたのに、失念しておりました。この 3 ヶ月ほど急速に老化が進み、極端にやる気が無くなって、西堀さんまでは『山岳』『会報』でチェックしていたのに、山田さんに関しては読み返しもしないで、松本さんから発行日当日に間違いを指摘され、編集の荒井さんにも迷惑をかけました。

次は私が知る山岳会の最強コンビの今西壽雄・藤平正夫両氏の思い出です。

◎ 1953 年 プレ・モンスーンに行われた日本山岳会による第一次マナスル登山隊は AACK(京都大学学士山岳会)の西堀栄三郎がネパール国王から登山許可を得て、今西錦司によって山岳会に移譲され実現した計画であったが、AACK のメンバーは独自にヒマラヤへの登山を計画し、今西壽雄隊長、藤平正夫登攀隊長ら数人のメンバーにより 53 年、アフターモンスーンのアンナプルナⅡ登山を実施することになり、日本山岳会にマナスル隊の装備の貸与を申し入れた。

しかしその時の山岳会の行動は鈍く、装備の貸与は実現しなかったため、AACKは独自に装備を調達して登山することになった。アンナプルナⅡの氷壁は当時の装備では登攀不可能と分かりアンナプルナⅣに転進し、アタック・キャンプを高度7100メートルに設営した。そのキャンプⅣに今西、藤平とシェルパのダナムギャル3人が寝ているとき、予想より早く冬のモンスーンが到来。烈風によりテントは破れてジュラルミンの骨組みだけになってしまった。そして壮烈な撤退が開始されたのである。キャンプⅢに到着したとき、今西、藤平にはまだ余力があったが、シェルパがダウン、やむなく泊まることになる。まさに死と隣り合わせの脱出行であり、無事にベースキャンプまで帰り着いた藤平さんの言葉「それまでの人生経験と登山の体験から得たすべてのものを注ぎこみつくした」に尽きる。そして今西・藤平のAACKの最強コンビは生涯を通じて強い友情に結ばれることになる。

◎今西壽雄（1914年～1995年）

最初にお会いしたのは1980年11月22日、梅田駅近くの丸ビル第一ホテルの喫茶室だった。関西支部主催の3日間にわたる支部長会議を前に東京から折井副会長、鈴木総務担当理事らが喫茶室に招待されたのだと思う。関西支部長だった今西さんはどういうわけか入会3年目の新人会員の前に座られ、差し向かいでお話する幸運に恵まれた。

お話は当然のようにマナスル登頂の話となって、依田カメラマンの撮った写真より、ギャルツェンの撮ったプラトールを歩いてくる今西さんの写真が一番の傑作で印象に残っているなどとお話した。翌日は6人から8人乗りのバン7～8台を連ねて丹波篠山の小金ヶ嶽などの山を縦走して秘湯「竈の坊」温泉に宿泊。夕食のしし鍋を囲むときも折井副会長に呼ばれて、再び上席の今西さんと3人で鍋を囲むことになって、遠慮なくしし肉をむさぼったのは、いま考えても長老のお二人を前に図々しい振舞いであった。



最終日の24日は梅棹忠夫さんが館長を務める民族博物館を見学し、今西芳子夫人の実家のお酒「四海王」をお土産に頂き解散となったが、バンを連ねて定例山行を実施しているなど関西支部の充実ぶりに感服した旅であった。

そして今西さんが5年後の1985年に山岳会第15代会長に就任され、私も4年間役員の末席に連なって身近に聲咳に接する幸運に恵まれることになるとは、まだ夢にも思わなかった3日間であった。

今西さんが1956年5月9日にマナスルに初登頂したときは41歳であった。エベレストなど他の8000メートル以上の高峰13座の初登頂者は2～30代で、41歳のサミッターは最年長である。そういうのは記録と呼ばないのかもしれないが、私は破られることのない記録だと勝手に思っている。

登頂の詳細については2016年発刊の『山岳』第111年の71ページに今西さんの手記が掲載されているのでお読みいただきたい。そこに記載されていないエピソードは第2登頂者の加藤喜一郎さんが「頂上の岩稜を降りて切り立ったカリガンダキに向かって小便をしながら横の岩壁を見ると隙間に封筒が挟まっているのが見えた。おそらく今西さんが1936年に鹿島槍のカクネ里で遭難した人や戦死した山友達の写真が入っているのだろうと思った」と述べている。

その加藤喜一郎も高所でも火が付くように特別に制作されたJACマーク入りの特製マッチ箱に鉛筆書きの几帳面な綺麗な字で隊員全員の名前を書いた紙を入れ、さらにピースの缶に重しの小石を詰めて頂上の氷雪の下に埋めてきた。サミッターの4人だけでなく隊員全員で登った象徴の意味を込めた行為であった。そのピースの缶は1985年無酸素で登頂した山田昇らによって日本に持ち帰られた。余計なことをしてくれたと当時は思ったが、ほかの国の登頂者に持ち去られなくてよかった、と思うようになった。

今西さんは登頂できたことを感謝する気持ちからネパール国関西地区領事を務め、在日ネパール人への援助のほか山岳会の行事にも多額の援助をしている。例えば1980年8月に西堀会長が1924年の英国エベレスト隊で登頂に向かったまま帰らなかったマロリー、アービンをサポートしたノエル・オデールを招いたとき、東京で世話したのは吉田宏会員で、大阪に迎えた時の世話役はIBM 関西支社に勤めていた池田智津子に、ホテルはスイートをとるように指示があった。指示の通

りにスイートで接待したために100万以上200万未満だが多額の請求書がまわってきた。山岳会が払ってくれるわけがない。困って今西支部長にお願いに上がったところ快諾とはいかなかったようだが「うん」と言われて支払ってくれた、と11月の支部長会議のあと池田女史から「申し訳ない事だった」と話してくれた。

今西さんは寡黙の人であったが、見るべきものは正確に確実に把握する方であったと思っている。1985年5月から会長を務めたときの筆頭副会長は山田二郎さんで、前半の2年をしっかりと補佐した。そして次の会長に山田さんを指名している。山田さんの副会長、会長としての活躍ぶりは前号で述べた通り。そしてもう一人の副会長に大塚博美さんが就任したが、彼は第3次マナスル隊の登頂に大きく貢献した人である。

マナスル登頂のカギはアイス・フォール突破にかかっており、シェルパのチョタレとともに登り切り、フィクス・ロープを装着したのは大塚さんだった。2人がプラトリーに消えたとき、下で見ていた隊員には「今回は大塚にやられた」と思った人がいたという。

しかし大塚さんは槇隊長が「すべてを仕切る人」と承知していたのだと思う。チョタレの「なぜ登らない」というのを振り切り「いいんだ」と言って降りてきている。私の勝手な想像だが、初登頂した今西さんが副会長に任命したのは、そのことと関係があると思っている。

そして山田副会長の後任には、今西とギャルツエンが登頂を終え、アタック・キャンプで待機して2人の降りるのをサポートした村木潤次郎さんを任命し、さらに言えば第16代会長に就任した山田二郎さんは、もう一人の副会長に今西壽雄さんの生涯の友である藤平正夫さんを任命している。山岳会の人事はそれら全ての人が繋がって続いているのだと思っている。

(追記) 渡辺兵力さんが藤平正夫さんに今西壽雄さんは「書いたものを残さない人だね」と言ったことがあるが、『山岳』第49年に三田さんの第一次マナスル隊の記録に続いて、AACKによるアフターモンスーンのアンナプルナⅡ、Ⅳの記録を詳細にレポートしている。緻密な報告である。

ギャルツエンによる今西さんのプラトリーを歩いてくる写真は、松田雄一さんが持ってきたオリンパス35というワイドレンズ・カメラで、カメラマンの依田さんが絞りF11,シャッター50分1、距離3メートルにセロテープで固定して、フィルムを巻きシャッターを押せば写るようにして渡した。ファインダーが見やすいカメラであったが、カメラは初めてのギャルツエンはいいセンスをしている。

◎藤平正夫（1924年～2003年）

ご縁が出来たきっかけは『山岳』第85年に藤平さんが、富山県知事による立山ライトアップ計画を阻止したことに関連して、山の自然保護の在り方、哲学を書き、同じ号に担当理事だった大森久雄さんから「山岳会の自然保護の歴史と展望」について依頼があり、私が書いたこと。その記事を藤平さんも読んでくれたのだと思う。1990年に発足したHAT-J(ヒマラヤ・アドベンチャー・トラスト日本)の会議などで、チョゴリザ登頂以降にされた中国奥地、青海での経験など、親しくお話しする機会にめぐまれた。

藤平さんは1983年に胃癌となって胃を切除され、ご本人が言われるように肉体は「急激に衰弱して老化した」。しかし肉体は衰えても、山岳会の副会長の4年、会長の2年間を通じHAT-J、1991年のンポジウム「ヒマラヤのエコロジー」開催費用（サー・ヒラリー、クリス・ボンントン、モーリス・エルゾーグ、UIAA会長のセガンティニー、メスナーの5人を招いた）、ナムチャバルワ登山の募金活動で剛腕ぶりを発揮している。1993年から2年間の会長時代に副会長を務めた嶋原啓佑さんの「藤平さんのような会長はもう出ないな…」という誉め言葉を聞いた。

会長を辞められた後は富山経済同友会代表として活躍されていて、山岳会の総会の時の立ち話だったが、素潜りで100メートルを記録し、映画グランブルーを製作した「ジャック・マイヨール」の話を聞いたが、彼の安全哲学は登山家の考えと全く違うね」というのを聞いて、教養豊かで幅広い活動をする藤平さんを代表に頂く富山の財界人たちは幸せだと思った。

素潜りで100メートル以上潜るとすると、フィンを付けていても10分ぐらいかかるのではないか。浮上するときも急激な水圧の変化で潜水病の危険がある。肉体の限界を超えた命がけの冒険であろう。

なお藤平さんについては『山岳』第99年のチョゴリッサ登頂で一緒だった平井一正さんの追悼記に詳しい。是非読んでほしい。

ここまで書いて力尽きた。京大農学部出身の今西さんと同期のウェストン研究、昆虫、イワナ研究の権威、安江安宣。初代福岡支部長の権藤太郎。農学の第一人者、中尾佐助。旧制松本高校出身の今井田研二郎。東九州支部長の野口秋人、村山雅美。自然保護委員会の長老、島田巽、織内信彦。登高会の青木勝、佐藤久一朗、谷口現吉、金山淳二。早稲田の関根吉郎、山崎安治。私の推薦者、折井健一。立教の堀田弥一、小原勝郎などの長老と若手の長谷川恒男の諸氏のエピソードは読者が許すならば次号に譲りたい。

運命共同体

＜田淵行男の自然観＞

小原 茂延

3年ほど前にハイキング仲間と渡良瀬遊水池に野鳥観察に行った。ここはご存知のように群馬県・埼玉県・栃木県にまたがっており、さらに茨城県にも接している。先の三県境が田んぼの中という全国でも珍しい土地で、元々の県境は渡良瀬川の中であつたのが流路の変遷がなしたものであるようだ。探鳥の方はベニマシコやタゲリなどの普段あまり見られない野鳥を日本野鳥の会の人がフィールドスコープでしっかりと捉えて見せてくれたので参加者も満足していた。帰途に何気なく見た数本のスッカリした樹木に目がとまった。樺の仲間のソウシカンバという名が浮かんだが判らない。(草紙樺は岳樺の別名であつた) 何の木だろうと皆で言っていると、一人の女性が「ドロノキではないでしょうか」と言われた。この方は日本植物友の会の会員で植物に詳しく、いろいろと教えて頂けるので有り難い参加者である。帰宅して検索すると、その通りであつた。それにしても、ドロノキとは珍しい名で、初めてにして印象深く刻み込まれた。その後この木について見聞したことは殆ど無かったが、かの「シュラーギントワイト アトラス」の寄贈者である松崎中正先生をお訪ねした時、何かの話からドロノキに話題が移った。先生は、「ああ、ドロノキね」とこともなげに言われ、「ドロヤナギなどとも言うようだ」とおっしゃる。植物図鑑によれば、「泥の木 ヤナギ科 本州中央部から北海道に分布」などとあり、泥のように役立たない木などと、ひどい評価であるが、マッチの軸木に利用などとあるから、相当お世話になった木である。

鉄道に関した紀行文などで知られる宮脇俊三さんの「最長片道切符の旅」(昭和54年新潮社)の中に、サロマ湖の辺りで停車時に車掌に尋ねるくだりがある。「これは白樺ですね」と宮脇氏、「いやドロです。マッチの軸にする木です。」とのやり取りが書かれている。

まだ現役の頃、仙台で仕事をしていた時に、宮城県大衡村の牧場跡地を訪ねたことがある。実に素晴らしい丘陵地帯で、もう牛馬の姿は無かったが、牧草も豊かに広がり、やや一段高いところに、樹形の良い一本(ひともと)の木が青空にすくと立っていて、何とも涼やかな風情を辺りに放っている。樹種は想像もつかず、地元の方に訊くと「ヤマナラシだ。」と教えてくれ、風が吹くとサワサワと音を立てるそうである。この用地は、その後 0 電機の工場敷地となったが、ヤマナラシは保存され、今は丘の上で爽やかな葉擦れの音を聞かせながら相当の大木になっていよう。ヤマナラシも柳の仲間で、葉柄が細いので風により音をたてるそうである。



以前上高地のウェストン祭に行った際に立ち寄ったビジターセンターの小パンフレットが出てきて、「上高地散策ガイド」(2011. 4. 27 発行)とある。その中に「よく見られる樹木」というページがあり、15 種類の樹木が掲載されていた。カラーではないので、やや判別するには難があるものの、樹形や葉のスケッチが添えられていて、簡単な特徴や生えている場所などが書かれている。その中に何とドロノキがあった！全く驚きであった。「ドロノキ(ヤナギ科) ドロヤナギともいい、高さ 20m になります。樹皮は黄白色で、そろばん玉のような模様があります。高山蝶のオオイチモンジの食樹です。」との説明に加え、葉と実の絵が載っていた。

高山蝶といえば、思い浮かぶのは田淵行男である。田淵の著「山の季節」の一節に、『夏山のフォルム』があつて、高山蝶誕生の項で「クモマツマキチョウが高山蝶の精と言われる可憐な美しさで愛好家の中で人気を集め、一方、オオイチモンジの方は雄渾清楚な稀種として蒐集家にとって憧れの的になっている。」と讃えている。なお、クモマツマキチョウの発見者は画家で日本山岳会草創期の登山家として知られた中村清太郎であり、田淵行男とも交流があったことなど、ご存知の方も多いと思う。

近藤信行さんの「安曇野のナチュラリスト」は田淵行男の生涯を活写した好著であるが、その第 5 章に「高山蝶との出会い」を設けて、その関わりを詳述し、オオイチモンジの細密画(1947. 7. 21 推定)を掲げ、同書 216 ページに、「上高地を例にとると、オオイチモンジの食餌であるドロノキの無差別伐採をはじめ、道路、宿舎、テント場などの拡張で蝶の食餌植物はどんどん失われてゆく。」(以下略)と書かれている。

ここで思い出したことがある。入会した頃ある会員に、かつて苗場山麓でブナを大規模に伐採していて無残な光景だったと話すと、彼が言うには、ブナは有用材でなく役に立たないからどうということはない、と言い放ったので私は唖然とした。自然保護とは全く異質なものを感じたものである。

田淵行男が高山蝶の生態解明に情熱を燃やしていたのは写真集や著作から明らかで、その一書「黄色いテント」のⅡ章で、「ドロノキとヤマナラシ 蝶の生る木」と項目を立てて述べているのを見つけた。その部分を引く。「この二つの喬木は、わが国のヤナギ科の一属、ポピュルスを構成する数少ない野生のポプラである。そしてこの二つの山地性のヤナギは、高山蝶オオイチモンジの依存するかけがえのない食樹になっていること、ドロノキは梓川べりに、ヤマナラシは常念岳東側の鳥川の谷に多いという。ドロノキとヤマナラシの盛衰は、そのまま梓の谷と、常念一の沢の高山蝶オオイチモンジの消長に密接につながった美しい運命共同体だからである。」と警告していたのである。

このように自然界は運命共同体の連鎖でもある。身近な例で蚕と桑の葉などは衆知のことである。

村上鬼城の句に 「夏草に這上りたる捨蚕(すてこ)かな」がある。

50mと65m

瀬戸 英隆

約2年前の11月末、友人夫妻と忘年旅行で、伊豆土肥温泉に行った。その夜、いつものようによく飲み、就寝は深夜となった。翌朝、これもいつものように早起きして入浴し、朝食のバイキングは大いに食べ、更に朝からビールと日本酒を胃袋に流し込んだ。チェックアウトは午前11時と遅く、部屋に閉じこもっているのも面白くなく、4人で散歩に出た。伊豆の海を右に見つつ少し歩くと左に入る山道を発見、「丸山に至る」と標識が出ている。友と目くばせ、行くか?! 4人で登り出す。ほんの少しの急登だが息が荒く、しかも酒臭い。10分位で頂上に立つ。標識には「丸山城跡(出城)」とあり、標高は50mと判明。かつて外国の侵入に備えた出城で砲台の跡もあった。ほんの少し歴史に触れた思いだった。

一方我が家は川崎市北部の、東京から神奈川に入って最初の多摩丘陵にあり、東京都稲城市に隣接している。駅から家までそれなりのきつい登りがあり、若い時代には通勤で往復したから、かなり筋力の鍛えになっていた。更に、家から目と鼻の先に小さな丘があつて、その奥は市の浄水場跡となっている。近隣住民の朝の散歩に絶好の場所である。筆者も荒天以外の日は毎朝ここを訪れ、展望台から遠く丹沢、秩父方面を眺めるのを常としている。で、この丘にも名前がついていて、「初音(ハツネ)山」と称している。標高は65mである。記録はつけていないが、年間300回位は登っているだろう。

山に行った記録はその都度きちんとメモしている。前述の丸山城跡も筆者の登行回数に数えられている。が、それより高い、この初音山は1回も記録に残していない。学生時代は記録魔と言われたが、何故これが抜けているのか、我ながら不思議のおそまつでした。

「本州を歩いて横断しました！」

夏原 寿一

ことの発端は数年前、東名高速のサービスエリアで貰ってきた道路地図にある。その地図は、東京、名古屋、富山湾、尾瀬がそれぞれ4隅に位置しているもので、私が普段なじみにしている山域をカバーしている。それを眺めながら登った山々をたどっているうちに、それらの山々の麓を歩けば、相模湾～富山湾を歩いたことになるということに気がついた。そんな思いつきがあつて、“麓”を歩き始めた。

歩いた地域は6ヵ所、距離はおよそ110km。そのルートを南から順番に紹介しよう。

- 大倉(丹沢の南麓) → 太平洋(相模湾) <23km>

大倉から水無川に沿って平塚駅の西方にある河口へ。水無川は途中で金目川、花水川と名前を変えている。歩いたのはちょうど桜の季節、河川敷が散った花びらで埋め尽くされていたのが見事だった。

- 焼山登山口(丹沢の北麓) → 藤野駅(中央本線) <13km>

道志みち一県道76号線。焼山登山口でバスを下りて道志川の方に歩き始めると、後ろから「もしもし、焼山はこっちですよ」の声が。「いえ、私はこっちへ」と言うと怪訝な顔をされた。道端にはいろいろな花が咲いているし、道志川の水もきれいだったが、中でも一番印象に残っているのは野鳥の囀りだった。大袈裟に言えば、それはうるさいぐらいの賑やかさだった。

- 塩川バス停(みずがき湖畔) → 増富ラジウム温泉 <5km>

菰崎駅からバスで塩川まで行き、そこから県道23号線を増富ラジウム温泉まで歩いて今回の目標を達成。そのついでに増富から足を延ばして金山まで行った。それは、50年ほど前に登った鷹見岩をゆっくり見上げるためだった。

＊ 鷹見岩については、緑爽会会報 No. 135 5 ページの小文「講演会から一初登攀」をご覧ください。(写真のキャプション「鷹見石」は「鷹見岩」の誤り)

- 入山辺(美ヶ原の麓) → 松本駅 <11km>

バスで三反田組合前まで行き、そこから薄川に沿いに松本駅に向かって緩い下り道を歩く。傾斜が緩いので段々畑の面積も広い。ブドウ畑もある。この辺一帯がブドウの産地だということは知らなかった。薄川の畔には花が咲き乱れ、はるか遠くには松本の街が見える気持ちのいい道だった。

- 島々駅跡 → 松本駅 <21km>

新島々駅から歩いて島々駅のあった所まで行き、そこから少し上手で梓川を渡って左岸を歩く。梓川は松本駅方面には行かないので、途中から松本電鉄に並行している広い農道を歩いた。両側は田植えの終わった田圃。正面には美ヶ原、振り返れば残雪の北アルプスといった贅沢さだ。

＊ 島々駅については、会報『山』No. 836 10 ページの小文「島々駅の写真」をご覧ください。

- 美女平 → 日本海(富山湾) <39km>

富山地鉄で立山駅まで行く。ケーブルカーで美女平に上がり、そこから材木坂を下る。高度差約 500m。柱状節理の岩がごろごろしていたり、倒木があつたりで歩き難いことこの上ない。下りてきて会った地元のお父さんに「アルペンルートに行ってきたのかい?」と声をかけられたので「材木坂を下りてきました」と言うと「よく行ったね。オレは草刈りで一度通っただけだよ。あそこを歩く人はめったにいないよ」と。

立山駅からは常願寺川の谷を歩く。富山平野に出ると常願寺川の土手からは劔、立山、薬師などが眺められる。劔を見ながら、初めて登ったときは3003mだったことを思い出した。

上に示した距離は地図上の最短距離であるが、実際には車道を避けて遠回りすることもあるし、ときには道を間違えることもあったので、歩いた距離はかなり長くなる。

歩いていると、桜並木の背景に、かつて歩いた懐かしい山々が見えたり、農道では野の花を愛でながら畑仕事の人々とおしゃべりしたり、酒蔵があると試飲はできないかと立ち寄ってみたり、楽しい思い出が沢山残った。とはいえ、車がすぐ脇を走り抜けて行くような道では、「変なことを始めてしまったな」との思いがよぎったこともある。

思い返せば、小学校の遠足で高尾山に行ったのが初めての山登り。そのとき「高いところは遠くまで見えていいなあ」と思った。それから奥多摩へ、奥秩父へ、そして谷川岳や北アルプスへと出掛けた、そんな私が太平洋と日本海の間に足あとを残した記録である。



～～《予告など》～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

10月講演会：10月29日（月）18時～ 104号室

講師：前日本山岳会会長 森武昭会員

演題：「自然エネルギーに関わって35年—現状の課題も含めて」

会報「山」9月号でも告知しています。会報がお手元に届くとすぐの週明けですが、小水力発電など貴重なお話が聞けると思います。多くの方のご参加をお待ちしています。・

11月山行：武田終焉の地から峠を越えて笹子へと歩く

日 時：11月20日（火） 担当：荒井正人

集 合：JR 中央線「甲斐大和駅」9時集合

行 程：甲斐大和駅・＜タクシー＞・景德院・・・大鹿峠・大鹿山・・・

道証地蔵・・・笹子駅（ささいち酒造に立ち寄り）歩程4時間

※今年の紅葉がどんなものかわかりませんが、歴史を訪ね峠道を歩きます



12月忘年会

日時：12月15日（土） 13時～ 集会室

会費：1000円（お弁当を用意いたしますが、おもたせ大歓迎です）

当日は、富澤代表より、「アメリカ西部・色鮮やかな岩山を歩く」と題して、映像を見ながらアメリカの国立公園の魅力を語っていただきます。

申込：弁当手配の関係もあり、必ず12月12日までに下記へご連絡願います

＜連絡先＞夏原寿一

1月山行：初詣山行

1月11日（金）。青梅丘陵ハイキングコースを予定しています。詳細は次号でお知らせします。

***9月山行：**9月29日（土）に予定していた「ダイヤモンド富士を眺める山行」（担当：近藤雅幸）は、台風接近の影響により雨が予想され、残念ながら中止といたしました。

―― 編集後記 ―――

猛暑の夏が遠い昔のことに感じられます。気がつけば本屋にはカレンダー、写真屋の店頭には年賀状のパンフレット。会報でも忘年会のお知らせをする時期となりました。しかし、桜が咲いたとのニュースもあり、今年は異常気象の一年で終わりそうです。

先日奥多摩を歩きましたが、台風による倒木があちこちにあり、折れた枝もおびただしい状況です。根こそぎ倒れて穴が開いたところは雨が降れば土が流出するでしょう。枝を片付けるくらいはできますが、修復作業となると、なす術がありません。そんな道にもトレランやマウンテンバイクがやってくるさらに追い打ちをかけるが如くです。いろいろ考えさせられた小さな山歩きでした。

＜次号予告＞12月25日発行の主な内容

報告：10月講演 11月山行 他に寄稿を予定

＜皆様からの投稿をお待ちしています＞